

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなことをお伝えします！

20

専門を活かす
ボランティア
広がるつながり

かから

加唐

ノリ子

2025年超高齢社会を考える会
レクメイト指導員

東京生まれ。子どものころ、父親の実家がある佐賀県に家族で移住した。志免町には昭和40年ごろに移り住んだ。看護師として働きながら、様々なボランティア活動に参加。志免町では、町内団体の要請を受け救護ボランティアとして活躍するほか、他市町でも精力的に活動中。
他市町での活動：オレンジリンクかすや・脳若サポーター・麻雀教室スタッフ

ボランティアを始めたきっかけと志免町での活動

昭和40年くらいに博多区の病院で働いていた頃、友人に誘われて知的障がい者のスポーツ大会にボランティアとして参加しました。

日頃は健康者とばかり関わっていたからか、スポーツ大会で体を動かす参加者の一生懸命さを目の当たりにして、ボランティアが初めてだったこともあって、新鮮で感動したのを覚えています。

その後、病院で耳が聞こえない方と関わったことがきっかけで手話に興味を持ち、「志免町手話の会」の講座に参加しました。講座を通じて聴覚障がいのある方々と知り合いになり、その方々の泊りがけ旅行の際に、救護スタッフとして参加しました。

また、博多の森で実施された国体や、よかトピア（アジア太平洋博覧会）、博多どんたくなど、勤務先の病院に依頼のあった救護ボランティアの活動に参加することもありました。こうした医療や救護のボランティア活動を通して、活動団体や活動者と知り合う機会が増えていきました。

近頃では、普段の生活の中で知り合った方とのつながりから声がかかって、看護師としての専門性を活かした救護ボランティアとして活動することが多いです。

専門性を活かしたボランティアとしての心得とは

習得した技術や知識を社会貢献活動に活かさない手はないと思っています。救護ボランティアは、だいたい2人1組で入ります。救急セット一式は団体に準備していただきます。志免町の活動では、今まで幸いなことに事故なく活動できています。

私が専門性を活かしたボランティア活動をするときにいつも大事にしているのは、相手の立場を尊重し、自分自身は自然体で臨むということです。そして、専門性を活かすためには必要な時に力を発揮できることが大事です。常に事故が起きないように、活動中の気配りと観察は欠かしません。また、蘇生法やその他にも知識として活かせるもの、技術の習得や勉強は常にしています。



▼“町をレクリエーションで元気にする仲間(メイト)たち”で集った「志免レクメイト」での活動

この他、ボランティアグループ「志免レクメイト」指導員としても、資格を活かして活動しています。町内会の福祉部などから社会福祉協議会にくる依頼に応じて、月に2~3回活動しています。コロナ禍も落ち着いてきて、今年は活動回数が増えそうです。

習得した技術や知識を、自分から、もしくはだれかに要請されたり頼まれたりした時には、活かさない手はないと思っています。それが社会貢献につながるとより良いですね。

「声かけ」からの関係を大切に 新しい世界を知る楽しさ

今、大橋（福岡市南区）で開催されている麻雀教室の見守りスタッフとして関わっています。大きな病気をした方や、闘病中の方、健康に不安のある方も参加していて、活動中は楽しさから痛みを忘れられる効果もあるそうです。私も最初は参加者の一人でしたが、18年ぐらい続けるうちに看護師だと伝わったからか、医療スタッフになりました。麻雀も一緒にしますから、頭の体操になり、私も楽しんで参加しています。

いろいろな方たちと知り合い、声をかけられたり誘ってもらったりした活動には参加してみます。新しい環境や、未知の世界に踏み込んでみることは好きな方ですね。ボランティア活動も、中に入って活動してみると新しい発見があったり、自分にはないものが見つけられたりします。そこに楽しさを感じています。

これからの社会に不可欠な 認知症の正しい理解のために

「RUN伴(ランとも)」という活動を知っていますか。これは、今まで認知症の人と接点がなかった地域の住民や企業、商店などがつながり、認知症になった方やその家族、医療福祉関係者などと一緒にタスキをつなぎながら走る、まちづくりのイベントです。現在、粕屋町の「RUN伴プラスかすや」という活動にオレンジリンクかすやのメンバーとして、また実行委員として関わっています。イベント以外にも、認知症サポーター養成講座や、認知症の方のデイケアなどに地域の高校生が参加する活動の支援などを行っています。現在は近隣2校の高校生が、Tシャツのデザインや関係各所への挨拶、動画作成などの活動に、楽しんで参加してくれています。

これから超高齢社会を迎えるにあたり、認知症への理解を進めていくことは大きな課題です。誰もが暮らしやすい町にするには、子どもから大人、商・工業関係者や医療福祉施設などが、それぞれの立場で認知症への理解が進んだ社会にする必要があります。そのためにも、RUN伴の活動を広げていきたいと考えています。2022年の活動では、志免町内も走り抜けました。今後の活動にもご注目ください。



取材を終えて

専門性を活かす活動が、加唐さんの心と体の健やかさにも繋がっていました。また、認知症への理解を進める活動では、多世代、多職種が楽しみながら活動に関わっています。子どもから大人まで、だれでも「できる」を活かした社会貢献活動ができることを、知ってほしいと感じました。

